



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2006, No. 21

【役員名簿 (2006-2008)】

代表: 生田省悟 (金沢大学)
 副代表: 高橋 勤 (九州大学)
 顧問: 秋山 健、上遠恵子
 事務局長: 結城正美 (金沢大学)
 事務局補佐: 小谷一明 (県立新潟

女子短期大学)
 喜納育江 (琉球大学)

会計: 高橋綾子 (長岡高専)
 辻 和彦 (福井大学)

監事: 西村頼男 (阪南大学)

ニューズレター編集委員:

林直生 (滋賀大学)
 村上清敏 (金沢大学)
 山城 新 (琉球大学)

会誌編集委員:

太田雅孝 (大東文化大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 パトリシア・ライオンズ
 (愛媛大学)

野田研一 (立教大学)
 山里勝己 (琉球大学)

コンピューターセンター:

岩政伸治 (白百合女子大学)
 北国伸隆 (萩光塩学院)
 山城 新

評議員:

ブルース・アレン (順天堂大学)
 池田志郎 (熊本大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 伊藤詔子 (広島大学)
 上岡克己 (高知大学)
 関口敬二 (大阪府立大学)
 高田賢一 (青山学院大学)
 巽 孝之 (慶応義塾大学)
 豊里真弓 (札幌大学)
 三浦笙子 (東京海洋大学)
 吉田美津 (松山大学)

研究助成:

稲本 正 (オークヴィレッジ)
 岡島成行 (日本環境フォーラム)
 木下 卓 (愛媛大学)
 生田省悟 (代表)
 高橋 勤 (副代表)

かく ま
角 間 の 里 か ら

— ASLE 日韓合同シンポジウムに向けて —

代表 生田省悟 (金沢大学)

■ 季節の推移がおかしいとは誰もが実感する昨今だが、ここ角間の地も11月下旬を迎えてようやく代赭色に染まり、いかにも里の秋といった雰囲気を漂わせているところだ。やがて北陸ならではの垂れ込めた雲とミズレ、そして雪の季節が到来する。会員のみなさんは晩秋、初冬をいかがお過ごしのことだろうか。

振り返ってみれば、今年度の全国大会もまた多くの会員に参加していただいたおかげで大成功であったし、内容からいっても ASLE-Japan の新たな可能性を切り拓ききっかけになったと確信するところである。とりわけ「韓国環境文学を読む」をはじめ、各研究発表における院生諸兄姉の活躍には感じ入ったし、今後の発展にもおおいに期待したい。また、準備に奔走されたばかりか最後のエクスカッションまで設定していただいた石幡直樹氏には大変お世話になった。まず、あの案内板に圧倒され、次に会場のすばらしさに思わずため息が出たのは私だけではあるまい。心から謝意を表する次第である。

さて、懸案の 2007ASLE 日韓合同シンポジウムについては、11月初旬にアレン、高橋勤、小谷、結城、それに私の5名が訪韓し、韓国側と協議を行なったことをまずご報告したい。

おりしも ASLE-Korea の年次大会がソウル女子大学で開催されていたが、発足後数年という活気にあふれた雰囲気や会員の熱意にじかに接することができたのは嬉しかった。さらに感激したのは韓国側の暖かい歓迎ぶり、礼をつくすことの大切さが文字通りに実感されてならなかった。ASLE-Korea からは日韓合同シンポジウムの趣旨・内容に対する賛意をすでにいただいていたが、双方で改めてその確認を行なった後、具体的な実施要項案などをめぐり、かなり立ち上がった点まで協議できたことは大きな収穫であった。詳細なプログラムについては追ってご案内するが、私たちが環境文学研究の多様性を追求するとともに本当の意味での深化に貢献する責務を担うとの立場を認識できたこと、そして東アジアからの発信という夢に向けた第一歩を踏み出そうとしていることの意義は

大きい。研究に関わるネットワークを構築し、何をどのように世界に伝えてゆくべきなのか。日韓 ASLE はこうした喜ばしい課題をまちがいなく共有しているのである。

日韓合同シンポにおける研究発表等は以前に募集を開始してあるものの、この場を借りて改めて応募をお願いしたい。私を含め、韓国文学に疎いとお考えの会員も多いとは思いますが、そうしたことへの顧慮は無用である。日ごろ環境文学研究を遂行する際に抱いておられる想いを募集要項に示した項目に接続させることをご検討いただければ幸いである。

また、日本の環境文学・環境言説に取り組んでおられる会員にも積極的な関与を期待してやまない。韓国のそれらとの共通部分や差異を私たちが理解し把握するためにはこうした貢献がぜひとも必要となるからである。

なお、総会で協議していただいたように、ASLE-Japan の年次大会(総会・研究発表)は日韓合同シンポジウムに先立ち、8月19日の午前に開催する予定である。これについても別掲のとおり募集するので、奮ってご応募いただきたい。

晴れていると、職場の一角から金沢市街の向こうに日本海をかすかに望むことができる。とりわけ夕暮れどきの光景は好ましく、日韓シンポジウムのことを思い浮かべつつ、足を留めたりすることもしばしばだ。いずれにしても旧盆を過ぎた残暑厳しい時期に開催するのはつらいところだが、多くの会員が金沢に相集い、暑さを吹き飛ばすような熱い議論を展開されるよう願ってやまない。■

↓↓↓ 第 12 回 ASLE-J/文学・環境学会全国大会報告 ↓↓↓

石幡直樹 (東北大学)

■第12回全国大会が、2006年9月9日(土)、10日(月)の2日間(翌11日(月)はオプションのエクスカージョン)仙台市の東北大学川内北キャンパスのマルチメディア棟(6F, M601ホール)で約50名の会員が参加して開催された。1日目は午前中(11:00~12:00)に役員会が開かれ、生田省悟代表による開会の辞(13:00)に続いてワークショップ「韓国環境文学をめぐって」が開催された。小谷一明氏(県立新潟女子短期大学)の司会により、韓国環境詩人3人を紹介した詩集 *Cracking the Shell: Three Korean Eco-poets — Seungho Choi, Chiha Kim, Hyonjong Chong*(訳 Won-Chung Kim 他、Homa & Sekey Books、2005)をテキストとして、ASLE-J 院生組織のメンバーが発表を行った。



まず佐々木郁子氏(大阪外国語大学・院)が韓国における環境問題と3人の詩人を紹介した後、森田系太郎(立教大学・院)氏が崔勝鎬(チェスンホ、1954~)、山本洋平(立教大学・院)氏が金芝河(キムジハ、1941~)、巴山岳人(東京都立大学・院)氏が鄭玄宗(チョンヒョンジョン、1939~)の作品の解説と批評を行った。その後配付資料をもとにフロアと活発な意見の交換がなされた。初めて触れる作品が多かったが、東アジアの先進工業国として似たような環境問題を抱えながらも、キリスト教や儒教の強い影響など日本との精神風土の違いが指摘され興味深い内容であった。なお、同詩集は2007年度日韓国際シンポジウムにおいても共通テキストの一つに取り上げられる予定である。

続いて午後3時半からは上岡克己氏(高知大学)の司会で加藤則芳氏の特別講演「自然とアメリカ——アパラチアン・トレイルの旅から」があった。1980年に八ヶ岳山麓に移住し、ペンションを営みながら自然をテーマにした

エッセイを発表している加藤氏が、2005年に全長3,000キロを越える合衆国アパラチアン・トレイルを踏破した際の模様を、多くの写真スライドを見せながらユーモアを交えて語った。アメリカの山岳の雄大さもさることながら、遊歩道やトレッカーを支える地域や人々の精神に感銘を受けた聴衆が多かったのではないだろうか。

その後夕方からは仙台市中心部のビヤホールに会場を移して懇親会が開かれた。当日になって参加された方を含めて会場は40名以上の会員で溢れんばかりの盛会であった。高橋勤氏(九州大学)の司会で、加藤則芳氏、上遠恵子氏(レイチェル・カーソン日本協会)、岡島成行氏(日本環境教育フォーラム)などのスピーチが披露され和やかな懇談の場となった。

2日目は午前10時から3本の研究発表があった。最初は松岡幸司氏(信州大学)の司会で岸本明子氏(北海道大学・院)が「北ドイツ・ヴォルプスヴェーデの芸術家村の環境と芸術」と題して、リルケの風景論の中に風景(画)における人間と自然の関係についての示唆を探った。芸術家の感性に触れ、その風景画に触発されて人々が押し寄せるようになったヴォルプスヴェーデの風景は、今日生態系維持の視点からも保護区に指定され、ひいては観光にまでつながっている。リルケの言葉は芸術と環境の究極的な関係を示しているという論旨は明解で説得力があった。続いて野田研一氏(立教大学)の司会で田中純一氏(金沢大学・院)の発表「環境への感性」の社会的要因に関する考察: Significant Life Experience 研究の動向と今日的意義」があった。田中氏は環境配慮行動を促す上での個人のライフヒストリーにおける重要な体験と定義される Significant Life Experience (SLE) の概念を用いて、石川県で環境保全活動に携わっている NGO・NPO メンバーを対象にした調査結果等に基づき体験の質的分析を試みた。小学校時代の自然体験が最重要という認識が最も多く見られるなどの、フィールドワークに基づいた分析結果は多くのことを語っているだろう。最後の木呂子豊彦氏(岐阜大学客員教授)の発表「自然を再生する力」(司会: 高橋 勤氏(九州大学))は、ビオトープの設計・施工に携わっている立場から、人間による自然の再生の用途を探ろうとする試みであった。人間を拒絶してそこにある原生的自然が人間を受け入れた時、原生的自然は二次的自然に変わる。二次的自然は、文化を持つ限り野生ではありえないという人間の生態系における曖昧な立場を否応なく気づかせる。我々が自然を再生しようとする時、目指すべきはどんな自然なのだろうかという本発表の問いかけの持つ意味は重い。

昼食と総会を挟んで午後2時から2時間にわたってラウンドテーブル「環境倫理/環境正義をめぐって」が開催された。司会の山里勝己氏(琉球大学)が個人的体験を交えながら環境倫理や環境正義の相対性と定義の難しさを指摘し、それ故にこそ理解の共有が重要となると強調した後、各パネラーの発表に移った。まず生田省悟氏(金沢大学)は「環境正義と水俣病・見舞金契約/北海道旧土人保護法」と題して justice のラテン語源の含意に言及しながら、水俣病見舞金契約書と旧土人保護法の文章を示して、「正義」の形成過程を分析した。続いての発表「環境正義、土地倫理、生物多様性——自然への環境正義の適用について——」では浜崎盛康氏(琉球大学)が、社会における環境的利益と負荷を平等に配分すべきあるとする「配分的正義」の概念をいかに自然に適用できるかを探った。そして生物多様性の重要性を根拠にしての絶滅危惧種や多様性に富む生態系の優先的保護は正当であるとする興味深い指摘をした。また、松永京子氏(学術振興会特別研究員)の発表(「黒い雨は平等にふりかかるか? : 先住民文学と日本原爆文学にみる人種、ジェンダー、植民地主義」)は、さまざまな要因での環境汚染による健康被害者にまつわる差別問題を浮き彫りにして、環境弱者救済の基盤としての環境倫理・正義の共通理解の必要性を訴えた。最後に亀井浩次氏(名古屋大学・院、NPO 法人藤前干潟を守る会)は「自然保護とゴミ問題をめぐるジレンマ——藤前干潟保全運動のケーススタディ」において、干潟保全に実際に携わった立場からその経緯を振り返りつつ、環境政策の危うさと難しさを考察した。埋め立て認可申請直前に環境庁(当時)が突然認可不可の判断を示し、名古屋市は干潟保全と徹底したゴミ減量を余儀なくされ、皮肉にも環境首都コンテストで1位になるという展開が示唆するものは複雑であろう。

翌日の11日にはオプションのエクスカージョンとして、宮城県と山形県の県境にある国定公園園白山高原で、紅葉川溪谷のトレッキングと東北地方の秋の風物詩「芋煮会」を楽しんだ。あいにくの小雨模様ではあったが、18

名の参加者が溪谷の滝巡り(約 2 時間)の心地よい疲労の後に、面白山高原駅前の「こがね荘」で山形風の芋煮鍋(芋煮には醤油味牛肉の山形風と味噌味豚肉の仙台風がある)を囲んだ。山形名物のそばやおにぎりで腹ごしらえの後に現地解散となり、ひと駅隣の山寺(立石寺)へ足を伸ばして芭蕉の奥の細道を偲んだ方もおられた。エクスカーション以外は、秋のみちのくの青空にも恵まれ、緑に囲まれた会場からの眺めも美しく、くつろいだ雰囲気にも包まれた杜の都の全国大会であった。■

ワークショップ「韓国環境文学をめぐる」

2006年9月9日(土)

小谷一明(県立新潟女子短期大学)

■2006年3月、成均館大学に於ける会議において、ASLE-Koreaより2007年日韓シンポジウム共通テキストとして、キムウオンチャン訳『殻を割る 三人の韓国エコ詩人—チェスンホ、キムジハ、チョンヒョンジョン』(*Cracking the Shell—Three Korean Eco-poets Seungho Choi, Chiha Kim, Hyonjong Chong*)が紹介された。第12回全国大会では日韓シンポに向けた思索の第一歩として、大学院組織に属する佐々木郁子氏、森田系太郎氏、山本洋平氏、巴山岳人氏より、この詩集に関する発表が行われた。

まず佐々木郁子氏からは韓国の歴史的かつ地理的な側面から見た環境問題の事例、そして環境をめぐる表現活動が紹介された。はじめに環境史として朴政権期の農村運動から漢江(ハンガン)の奇跡、1997年IMF指導へと至る過程が俯瞰され、イタイタイ病に類似した1985年「温山(オンサン)病」など、大きな衝撃を与えた公害問題が例示された。寺西俊一『環境共同体としての日中韓』などを参考文献として掲げ、国境を越える漂着ゴミに対し東アジアの問題として取り組む現状が紹介された。また序論その他の文献で展開される3詩人の経歴や詩の内容、さらに韓国詩人の大半が環境詩、自然詩に関わっている状況についての報告があった。佐々木氏の発表は、韓国の環境表現を理解する作業のなかで、東アジアの環境、およびその表現活動を考える枠組みを日韓シンポへむけて模索していく起点となった。

森田系太郎氏からはチェスンホ(崔勝鎬)(1954-)の「コンビナート」をはじめとする詩が紹介された。チ



ェスンホの作品では、しばしば社会派リアリズムの対象となる貧困、醜悪、汚染が詩の素材となっている。例えば「自動販売機」と「売春婦」、「白い汚水」と「母乳」などが組み合わせられ、身体と自然の汚染が圧縮された近代の視点で表現された。森田氏は伊藤比呂美の詩を取り上げ、チェスンホの詩に植民地化された身体と近代の母子観、その背景にある男性批判を、煙突といったイメージを引用しながら論じる。そして旅行者が水面上の美を鑑賞し、詩人が醜悪な水底を見る姿勢などに脱幻想を読みとっていく。大衆消費社会における欲望の風景に、日韓の詩人に共通する近代/セクシュアリティ批判を読みとる発表は、圧縮された近代における環境詩の解釈に有効な視座を提示することになった。

山本洋平氏が担当したキムジハ(金芝河)(1941-)の「貝がらを割る」では、中枯れて空洞となった樹に人が重ね合わされ、その内側に新たな樹が育ち、古い皮膚を破瓜していく。この「充溢の空」(full-empty)に、精神ではなく、身体という自然に自己を引き渡す姿勢が論じられた。また「愛」では、静寂に佇む樹の描写にキムジハのカトリシズムを越える祈念、他者への眼差しを読み取る。世界の沈黙を自らに響かせる行為は、詩人の疎外感と同時に他者への慈しみを物語っていた。身体を世界の接合点とすることで、他者を愛しうるかという問いに向き合う詩作に、山本氏はヘンリー・デイヴィッド・ソローとの類似性を読みとる。『五族』、『黄土』といった初期の叙事的な抵抗詩と、

生命を謳う近年の詩を思想的変化としてだけではなく、未来への想像という視点でも結びつけていく論旨に、環境詩の射程を拡げる可能性を感じる事ができた。

巴山岳人氏は、チョンヒョンジョン(鄭玄宗)(1939-)の「私の血は夜の空で輝いている」にある「カルシウムと鉄分を共有する兄弟」といった表現を、ラブロックのガイア仮説を援用しながら、諸存在の相互関係を示す詩的かつ科学的イメージとしてとらえる。「雲の種子」においても、植物プランクトンの一種、エミリアナ・ハクスリーから始まる有機的連関が語られ、さらに「滴」という詩では「道」、「流れ」といった循環的な生命存在への物質的想像力が示される。ここに「緑の言葉」を通した他なる存在への、開かれたレトリックの指向性を巴山氏は読みとる。その一方でマチュピチュの花売りが登場する詩では、少女が「崇高な」景色に溶け込む描写により、この場所で花を売る背景へ

の関心が希薄化すると論じる。科学的な言説が欠落させる社会文化的な参照枠への言及は、物質的想像力の歴史性を考える重要な契機となった。

本発表では会場より、翻訳テキストにおける原語、つまり朝鮮語を参照することの必要性和、テキストを取り巻く歴史的な文脈、文化的な観点を理解する重要性が指摘された。テキストに散見される恨(ハン)、涅槃、三界といった具体的な言葉と、仏教、儒学、無為、東学党、ムーダンといった思想・宗教の関連性や、伝統的時調といった文体の研究を進める課題が共有された。その一方で、近現代における身体や言語文化の混濁性という論点から、東洋と西洋といったカテゴリー自体も問題化された。本発表では、東アジアの近代化に関する歴史的な再読とともに、そこで生み落とされた主知、主情が環境詩へどのように翻訳されたのかという問いへの糸口が見いだされたと思われる。■

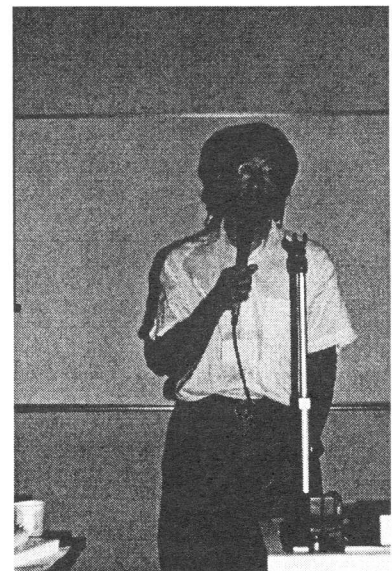
講演要旨 加藤則芳氏

「自然とアメリカアパラチアン・トレイルの旅から」

上岡克己(高知大学)

■アメリカは矛盾に満ちた国である。国外ではテロ撲滅と称しイラク戦争をはじめとして様々な軍事作戦を展開し、国内では高度物質文明を限りなく謳歌し、二酸化炭素を排出し続ける。しかしながら一方で自然保護の視点から眺めてみると、アメリカは世界に冠たる自然保護のシステムを構築している国でもある。長年シエラ・ネヴァダをホームランドとしてアメリカの自然と向かい合ってきた加藤氏によれば、シエラ・ネヴァダを調べることで、自然保護の真髄を理解でき、日本の自然保護を考える上で多くのヒントが与えられる。「それを紹介するのが私の仕事である」と氏は語る。

加藤氏にはもう一つの関心事があった。それはアメリカ東部14州にまたがるアパラチア山脈沿いにつくられた「アパラチアン・トレイル」。(正式には Appalachian National Scenic Trail れっきとした国立公園局が管理する国立公園システムの一つである。1937年完成。1968年にアメリカ最初の国立景観自然歩道となる。現在年間400万人のハイカーが訪れる。)国際政治を専攻した加藤氏にとって、アメリカを総合的に理解するためにはウィル



ダネスが支配するジョン・ミューア・トレイルとは異質のアパラチアン・トレイルに挑戦することは必然の成り行きであった。

氏はスライドをまじえながら、2005年4月3日から187日をかけて完全踏破したアパラチアン・トレイルの魅力を熱く語る。アパラチアン・トレイルの歩き方は、南のジョージア州スプリング・マウンテンから北のメイン州カタードイン山までの北行きルートと、その逆の南行きルートの2種類あり、加藤氏は前者を選択した。カタードイン山を最終目的地にしたのは、ソロー著『メインの森』への熱い想いがあるからである。全長3500kmのこのトレイルは、アメリカの自然を特徴づけるウィルダネスを貫く道というよりは、むしろアメリカの自然と文化、歴史が交差する道である。実際のところ、ハイウェイや町、牧場を横切ることもしばしばあり、加藤氏自身も7~10日ごとに文明世界に出かけ、食糧補給を行っている。そこで体験したのは、地元住民の暖かいホスピタリティーであった。トレイル沿いには無料の食料が置かれ、教会で宿泊することもできる。トレイルを歩くハイカーは天使に会えるとはしばしば言われているが、暖かくもてなしてくれるトレイル沿いの人々こそ trail angel かもしれない。彼らのサポートがあつてはじめて成り立つ旅が長距離自然歩道の旅なのである。

このトレイルを歩きながら加藤氏が感銘を受けたのは、このトレイルの行き届いた管理である。日本では造るだけ造っておいて、管理運営には全く関心を示さないのと比べ、アパラチアン・トレイル沿いにはトレイルを維持する数多くの組織がある。この地元に密着した活動組織こそ、アメリカの自然保護運動を草の根で支えている人々の集まりである。一方問題点も指摘する。それはトレイルの利用者の大半が白人ということである。2005年アパラチアン・トレイルを完全踏破した412人のうち90%が白人ということである。これはアメリカ社会の歪みを象徴している。

加藤氏はアパラチアン・トレイルに挑戦する理由をいくつか列挙する。1.地質学的魅力と植生の豊かさ。世界で2番目に古い地層を観察できる。グレイト・スモーク山脈国立公園内では多種多様な植物に遭遇できる。2.アメリカ固有の歴史・文化の体験。ヨーロッパ系アメリカ人が住み着いたこの地域で独自に発展した音楽(アパラチアン・ミュージック、「おじいさんの古時計」「アメイジング・グレイス」もここで生まれた)を聴くことができる。また南北戦争の戦跡地、プランテーションを訪れることも可能。さらにチェロキー・インディアンの悲しい歴史に想いを馳せることもできる。3.宗教的・政治的側面。アメリカの保守主義の原点を辿ることも可能である。4.地域の人々のホスピタリティーを身にしみて感じる。心の交流ができる。5.アパラチアン・トレイル・コンサーヴァンシー(Appalachian Trail Conservancy)が認定する完全踏破者だけのワッペンが与えられる。6.文学的関心。ソロー著『メインの森』以外にも、ティンカー・クリークを舞台にしたアニー・ディラード著『ティンカー・クリークのほとり』を思い出す。

アパラチアン・トレイルの旅を終え、加藤氏はボランティア組織が自ら進めている日本でのトレイル造りに関心をもって参加している。自らの意志でトレイルを持ったとき、はじめて「歩く」楽しさが見えてくるかもしれない。加藤氏はいみじくも「自然を楽しむ人は自然を守る必要がある」と語ってくれた。講演を聴きながら筆者は日本でも「歩く」文化は伝統として残っている(四国遍路や熊野古道といった巡礼が一例である)、自らを見つめ直す「歩き」のほかに、自然、文化、歴史への関心を加味した「歩き」、例えば芭蕉の奥の細道のような「歩き」の旅、それを可能にするトレイルの整備ができれば、「歩く」文化の再発見となるのではと思った次第である。なおアパラチアン・トレイルの文学を扱った書として、Ian Marshall, *Story Line: Exploring the Literature of the Appalachian Trail*(1998)がある。ナラティブ・スカラシップの代表的な作品の一つで、『文学と環境』No.2にScott Slovicの書評が掲載されているので参照するといだろう。

今回の講演で話されたアパラチアン・トレイルの旅は、本にまとめられて来年夏には上梓されると聞く。今からその刊行が楽しみである。(本稿は加藤氏の講演に筆者の感想を加味したものである)■



『人は自然と共生できるのか？』

— 第 12 回文学・環境学会 全国大会・研究発表を拝聴して—

森田系太郎（立教大学・院）

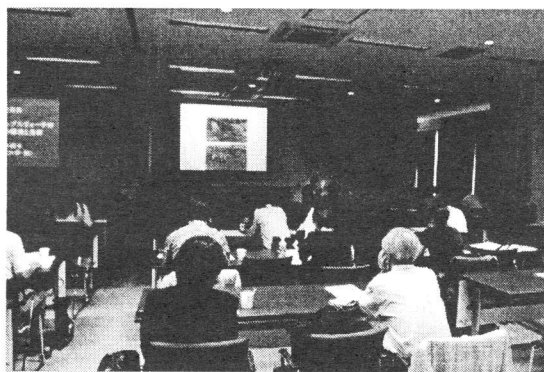
人は自然と共生できるのか？

■第 12 回全国大会（仙台）での以下の三氏による研究発表に通底していたのはこの問いだったように思える。

研究発表のお一人目は、北海道大学・岸本明子氏の「北ドイツ・ヴォルプスヴェーデの芸術家村の環境と芸術」であった。岸本氏は、詩人リルケの芸術家モノグラフィー『ヴォルプスヴェーデ』を基に、まずヴォルプスヴェーデの芸術家村の歴史、地理などについて写真を交えながらお話をされた。そしてヴォルプスヴェーデという沼地の風景が都会部から移り住んだ風景画家たちによって再／発見された事実、及び風景画家たちが成功を収めたことを提示する。岸本氏はこの再／発見の理由を「ドイツ的なものが求められていた時代に田舎の風景が都市部の人間の心を捉えた為」と位置付け、「都市部の人間のノスタルジックな気分は近代化の産物であった」と分析された。これは私にとって既視感があった。現代の都会の人間が田舎に赴き「自然はやっぱり美しい！」と叫ぶ光景は、まさにこれではなかったのか。その後は「芸術が人間と自然を近づける」としたリルケの風景論やヴォルプスヴェーデの現状をお話された。現状については、湿地が風景画を通じて観光地化された結果、自然保護が誕生したというサイクルが示された。

お二人目は、金沢大学・田中純一氏の『『環境への感性』の社会的要因に関する考察—Significant Life Experience 研究の動向と今日的意義』であった。田中氏は「環境に配慮した行動とその選択要因につい

ての研究は数多く実施されているが、個人のライフヒストリーにおける特定の時期の自然体験や自然にまつわる経験と、環境に配慮した行動との関係性についての研究蓄積は多くない」（プログラム）ことに注目され、この問いに答えるべく Significant Life Experience (SLE) 研究に着目する。そして SLE を「環境に配慮した態度や行動と強い結びつきがあると自分自身が認識する体験」と定義付ける。続いて、国内外での SLE 研究の動向を紹介され、「意識と行動は結びつかない」という認識から、「幼少時代の自然体験・経験がその後の環境配慮行動選択に影響を及ぼす」という仮説を提示する。そして石川県で環境保全活動に携わる方を対象とした調査結果に基づき、「小学校時代（6-12 歳）に身近な場所で動植物とふれ合う体験・経験が重要」等の分析結果を紹介された。また今後の研究課題として、年齢や場所その他



の社会的変数の導入、対極／類似集団との比較考察、分析カテゴリーの妥当性などを列挙された。

田中氏のご発表は量的調査の「先行研究調査→仮説→データ収集分析」という枠組みに沿った「社会的」なもので、「文学的」な発表が多い本学会に新風を吹き込むものであった。司会の野田研一先生がおっしゃったように、田中氏のご発表のような「見ると環境文学とは関係性が深くないと思われるものを敢えて取り上げる当学会の学際的な視野の広さを再確認した。今後は、発表者ご自身も認識されていたように、先行研究と比較できる形での研究調査が期待される。

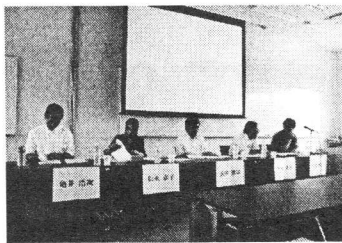
最後は、岐阜大学の木呂子豊彦先生のご発表「自然を再生する力」であった。初めに先生はこれまでのご活動を基にしたお話をされた。ビオトープについての一般的なお話から、実際に先生が関わられた小学校のビオトープの例に移る。生物多様性に係る動向を押さえた後、ソローと国木田独歩の著書を踏まえながら、ご発表の中心であり「原生的自然」に対置される、「二次的自然」のお話に移行する。ソローも国木田も「二次的自然の申し子」であった。「原生的自然」が人間を受け入れた途端、それは「二次的自然」に変わるからである。この辺りのお話はまさに「環境と文学を結びつける試み」(プログラム)であった。川についてのお話に移って「川はなぜ二次的自然と呼ばれないのか？」という問いから、さらに本質的な問いである「人間と自然との共生は如何にして可能か？」を

提示する。先生は物質循環の観点からの見直しを強調された。最後は「自然を再生する力とは？」と問いかけ、国木田の「驚きたい」やカーソンの「センス・オブ・ワンダー」という概念が重要であることを示唆された。

木呂子先生のご発表は、当学会の中心的なテーマの1つである「文学と環境」について、「自然について全く語らなかった作家は存在しない」(プログラム)という認識を基に、先生ご自身のご経験とソロー・国木田の両面からアプローチした野心的なものであった。

人は自然と共生できるのか？

現在<私たち>に鋭く突きつけられているこの問いに対して、回答の先鞭をつけてくれたシャーマンのような三氏の今後のご研究から目が離せない。■



ラウンドテーブル「環境倫理/環境正義をめぐるって」

中山麻衣子 (愛知県立大学非常勤)

■第12回全国大会2日目のプログラム最後を飾ったのは、4名のパネラーによる「環境正義」をめぐるラウンドテーブルであった。それぞれの研究者が各専門分野からの見地を提示することによって、学際的かつ立体的な議論が交わされた。

最初に、金沢大学生田省悟氏は、水俣病見舞金契約書および北海道旧土人保護法におけるレトリック分析と、法という言説の下に押さえ込まれたコミュニティの肉声について、熱のこもった報告をされた。「環境正義」(environmental justice)という言葉・概念は、日本語としての一般化が未だ不十分である。justiceとは、ラテン語源ではjus(公正の原則)であり、環境正義とは、「場所」におけるコミュニティのあり方としての「環境」に、このjusを適用するものと言える。しかし近代は、法という魂の抜けた「書き言葉」を介して、コミュニティを破壊してきた。水俣病見舞金契約書および北海道旧土人保護法においても、漁民あるいは採集・狩猟を行う人々の多様な生活全体が、彼ら自身の日常語で有機的に語られることはない。法という言説は、コミュニティにわずかな補償金と権利を与えることによって、逆に彼らを権利から遮断してしまうのである。

次いで琉球大学浜崎盛康氏は、「環境正義」の定義づけとその自然への適用のあり方について、例証を交

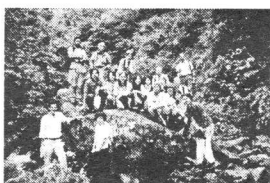


えながら概括された。環境正義とは、環境から得られる便益と負荷の両方を、人間社会において平等に分担し合うことを目指す。また、特に「配分的正義」の原則を検討することが、環境正義を人間だけではなく自然に対しても適用する上で重要となる。レオポルドの土地倫理の概念に倣えば、環境正義を、人間社会の範囲を越え、自然(=土地)にまで広げて適用することは可能だ。例えば「生物多様性」という今日の価値観は、環境正義を自然に適用する上での根拠となる。人間以外の生物の利益・不利益をも考慮し、特に絶滅危惧種など、優先すべき対象を詳細に検討してゆくことが今後の課題と言える。

次に学術振興会特別研究員である松永京子氏から、先住民文学と日本原爆文学にみる人種、ジェンダー、植民地主義に関し、比較文学の見地から非常に示唆的な報告があった。被爆者の現実を世界に知らしめ、名作として名高い井伏鱒二の『黒い雨』には、汚染された「血」というメタファの中に潜む、女性の身体への抑圧的な表象が見出せる。またサイモン・オーティーズやシルコーなどの作品においては、女性の身体と同様に抑圧される客体として、先住民の居留地、そして植民地という場所が描かれる。米国における核実験の90%は、先住民の土地で行われてきた。先住民にとっての「場所」は、行政側からは国家犠牲の地と見なされるのだ。核による環境支配は、かつての西欧諸国による植民地化・搾取の構図にもなぞらえられる。

最後に、名古屋大学院生であり、NPO 法人「藤前干潟を守る会」において長く現場経験を積んで来られた亀井浩次氏が、名古屋市の廃棄物最終処分場建設地として存亡の危機にさらされていた愛知県藤前干潟が、市民団体による行政への粘り強い交渉によって計画の撤回を勝ち得るまでの経緯を、活動の立役者の一人としての視点から証言された。干潟保全の決定により、180度の方針転換を余儀なくされた行政は、名古屋市民に対し、細分化されたごみ分別収集を半ば強引に徹底させた。ごみという人間の負の遺産を自然環境に押し付けるのではなく、まず人間側に平等に分担させたわけだ。藤前問題は、「環境正義」が実際に機能した貴重な前例を次世代に残すことになったが、亀井氏によれば、同様な自然保護活動において、「自然の権利」といった理念は、行政への対立軸としては未だ脆弱であるという。いかに理念を実践で通用させていくのか、さらなる議論が望まれる。

人種・ジェンダー・先住民の問題などと絡み合い、今日ますます多様化・グローバル化する環境問題。司会の琉球大学山里勝己氏からは、我が国の米軍基地、アイヌ、水俣などの問題すべてを、もう一度環境正義という視座から捉えなおすべきである、との提言があった。また、未だ人間中心主義的である環境正義の概念が、生物も含めた全体へと拡大してゆくことも、期待される。

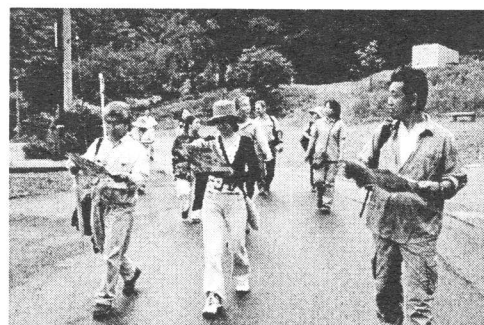


エクスカージョン後記

高橋 綾子 (長岡高専)



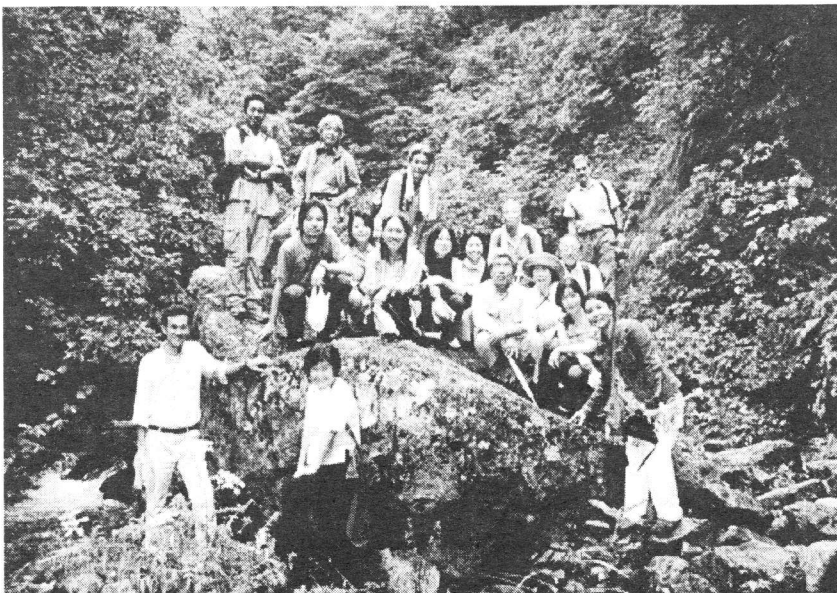
■ 杜の都仙台東北大学での研究発表、講演会、ラウンドテーブルなどを行った第12回の今回の全国大会を終え、引き続いて仙台市郊外にある紅葉川溪谷でのエクスカージョンが行われた。9月11日、仙台駅の伊達政宗像前に8時30分に集合。雨天中止が直前まで心配されたが、仙台は曇り空だった。参加したのは、石幡、生田、村上、野田、西村、ブルース、高橋勤、浜



崎、結城、喜納、豊里、横田、辻、亀井、小松、岸本、河野、高橋綾の 18 名。JR 仙山線に乗ること、小一時間、宮城と山形県境となる長いトンネルを抜け、面白山高原駅に到着した。その名の通り、高原の中に立地する駅の周辺に広がるのは、豊かな山々。われわれが向かう紅葉川溪谷であった。ちなみに面白山高原は山形市に位置し、山寺までも近距離である。しっとりと雨でぬれた山並みの風景は、豊かな水源を感じさせるものであった。

溪谷入り口から、トレッキングを開始した。紅葉川溪谷という名の通り、溪谷に流れる川にそって散策路がある。山道、木道、岩盤を削った道など整備されたコース。この川の流れと平行に JR 仙山線が走っている。溪谷入り口から散策路に入るとすぐに、散策路と JR の交差点となるトンネルがある。背丈よりも低い、暗いトンネル。なんとこのトンネルにはクリークが流れていた。そのトンネルを抜けると、すぐに最初の滝となる「千太滝」が見え、つり橋を渡った。雨のせいか、溪谷の水は豊かに流れ、高橋勤先生が、「山女がいる」と何度も言うておられたのが印象的であった。紅葉川溪谷は魚族保護区間で魚釣りは禁止なのだという。道には、ピンクと白の釣舟草、観音草。水面には時折川カラスが水浴びをしながら低空飛行をしていた。わずか一時間ほどの間に、絹糸の滝、藤花の滝、霞滝、黒滝など、いくつもの水源を見ることができたのは驚きであった。数々の水源に恵まれた川には、鋭い岩肌と水流がぶつかりあう淵があった。滝、岩肌、青い紅葉の葉、ブナの林が交互に繰り返された。青いもみじも生命力にあふれ美しかったが、もみじの紅葉の時期にもう一度足を運びたいと思った。このトレッキングコースの終点に程近い場所にコスモスベルグという花畑があって、晩夏から中秋にかけて、8 種類のコスモスが咲くらしい。

道すがら、「滝」をめぐるの会話。アレン先生が「アメリカ人にとって滝は、“Bridal Veil”と結びつくことが多い」と言うと、結城さんが「日本人にとっては、老女の白髪と結びつく」と返す。アズリーらしく、自然表象の話題となった。10 時に溪谷に入り、1 時間 15 分後、トレッキングは無事終了した。石幡先生は、終始足元の危険を心配して下さったし、先に出されたエクスカージョンの案内の中では、「大分軟弱な企画？」と書いておられたが、心地よい汗と、溪谷の美しさを味わった充足感に満たされた企画であり、風光明媚で豊かな水が流れるコースは大変すばらしいものだった。野田先生は「アズリーのエクスカージョンではじめて完走した」と感慨深げであった。また、西村先生は足の痛みを克服して完走された。



正午近く、「こがね荘」に到着後、待望の芋煮会となった。サトイモ、牛肉、ネギ、コンニャク、ごぼうをしょうゆ味で仕上げた芋煮をいただいた。合宿所のような雰囲気、参加者みんな終始笑顔であった。30 分ほどで、2 つの大なべを 18 人で完食。その後、山形のそば、おにぎりをまた完食した。

残暑の紅葉川溪谷トレッキングと芋煮会という、東北ならではの企画を立案し、中心になってお世話をしてくださった石幡先生に心からお礼申し上げたい。杜の都、仙台の緑豊かなキャンパス、豊かな水源紅葉川、英気を養う芋煮、エクスカージョンは無事終了した。■



【報告】

第18回エコクリティシズム研究会

真野 剛 (広島大学・院)

■2006年8月12日、広島大学の名誉教授で、現在、松山大学の教授を勤められている伊藤詔子先生主宰のエコクリティシズム研究会が、広島大学千田町キャンパスにて行われた。周知の通り、この研究会は ASLE-J 分科会の一つであり、その活動は今年で18回目を迎えた。今年も新たに4名の会員を迎え、その活動は益々、盛大なものとなった。プログラムは例年通り、「作品紹介」、「批評書研究」、「シンポジウム」という3部構成で行われた。

午前中に開始された作品紹介では、3冊の図書の輪読紹介がなされた。まずはアメリカを代表する古典文学の一つ、クレヴクール *Letters from American Farmer* (1782)[担当リーダー:藤江啓子氏]であった。ご存知のとおり、アメリカを客観的視点で描き出したクレヴクールの代表作である。語り手による自由の土地アメリカの紹介は、やがて奴隷制という闇の部分をも露にしていくなか、当時、多くの人々を魅了した作品であるが、執筆の背景には著者のアメリカ観と共に、アメリカの持つ光と闇に対しての心の葛藤をも垣間見ることができる。

次に紹介されたのは、一変して現代女性作家レベッカ・ソルニットの *Hope in the Dark* (2005)[担当リーダー:熊本早苗氏]であった。著者はサンフランシスコ在住の、批評家、政治活動家といった顔を併せ持つ。環境運動や政治文化に深い関心を持ち、2003年 NBCC(全米批評家協会賞)を始め数々の章を受賞している。本作品ではベルリンの壁崩壊、WTO の抗議デモなどといった事件から、ネヴァダの核実験施設、生態系の保存運動などの環境運動にいたるまで、20世紀に起こった様々な歴史を振り返りつつ、その影で作用していた人々の力に焦点を充てた作品である。暗闇の歴史を切り開いてきたのは結集した人々の力であった。

作品紹介の最後を飾ったのは、リンダ・ホーガンの *Solar Storms* (1995)[担当リーダー:横田由理氏]で

あった。著者はネイティブ・アメリカンのチカソー族出身であり、コロラド大学にて教鞭を執る傍ら、執筆活動に励んでいる。ネイティブ・アメリカン文化の将来に強い危惧を抱いており、彼女の作品は土地やそこに生息する動植物との関係を描いている。本作品は世代や血縁関係を越えた愛の物語である。17歳のAngelが曾祖母を頼って共同体へとやってくるころから物語は始まる。共同体に住む身内たちと出会い、共に生活する中で、彼女は進みゆく環境破壊の現実と人の連鎖を体感していく。主人公 Angelを中心に、ネイティブ・アメリカンの抱く、自然、文明、そして交錯する家族の絆への想いを描いた作品であった。

午後からは批評書研究へと移り、同じく3冊の批評書の研究報告がなされた。新鋭の批評書による指摘は、我々に文学と環境への斬新な見解を提示してくれた。始めに、キャロライン・マーチャントの *Reinventing Eden: The Fate of Nature in Western Culture* (2003)[担当リーダー:浅井千晶氏]が取り扱われた。著者は西洋文明において楽園の復活を目指す強力な支柱であった物語を、総称して“Recovery Narrative(回復のナラティブ)”と呼ぶ。それは聖書の創世記から始まり、歴史を追いつつ近代へと進んでいく。そして後半の章では「新しい物語」として男女間、あるいは自然との「パートナーシップの物語」を提案する。それぞれの時代において存在した“Recovery Narrative(回復のナラティブ)”を環境保護史、女性やマイノリティーの歴史と共に言及しつつ、そのイデオロギーと社会的影響力について論じた書である。

次に発表されたのは、エドワード・ソジャの *Thirdspace: Journey to Los Angeles and Other Real-And-Imagined Places* (2005)[担当リーダー:吉田美津氏]であった。アンリ・ルフェーブに傾倒する著者が三元弁証法を用いて、空間の構築は客観的に知覚される空間(第一空間)、主観的に思考される空間(第二空間)の二項対立ではなく、3つ目の空間、すなわち生きられる空間(第三空間)の存在によって成り立っていると主張する。そして第三空間の展開として、エドワード・サイードのオリエンタリズム批判、ホミ・バーバの hybridity(混交)といったポストコロニアル批評や、同じく独自の第三空間を唱えたミシェ

ル・フーコーのヘテロトピア(混在郷)などに絡めながら考察している。

最後の批評書として、リチャード・ホフリクター編集の *Toxic Struggles :The Theory and Practice of Environmental Justice* (1993) [担当リーダー:中垣恒太郎氏] の研究発表がなされた。70年代から急速に発展してきた環境保護運動は、80年代に入ると、負の影響による被害が極めてマイノリティーコミュニティに集中していることに目が向けられるようになる。やがて、“環境正義”の提唱が表舞台へと現れるようになった。本書は人種、性、所得などの違いによって、環境破壊の被害者となった人々が導いてきた“環境正義”を、様々なイデオロギーを踏まえつつ、アメリカを主体にしてその理論と実践について編纂したものである。収監された23本の論文の中から、国家政策や人権問題、そして第三世界との連携などをテーマとした7本を取り上げて行われた。

そして、今研究会のプログラム最後に、“米エコクリティックたちの最新作をめぐって” [担当リーダー:伊藤詔子氏] と題して、ミニシンポジウムが行われた。これは当研究会の共著企画『ユートピア・エコトピア・ディストピア』に向けて、米国の4名の名だたる研究者たちが書き下ろした最新の未発表論文を、各翻訳担当者たちが紹介するという形で行われた。それらは近年のエコクリティシズムの傾向を示すものであり、エコクリティシズム研究が新たな段階へ進んでいることを認識させる論文であった。

今回の研究会を通して、一つのキーワードとなったのが“環境正義”であろう。マイノリティーや低所得者、そして女性たちの虐げられてきた歴史を辿ることは、環境人種差別の内実を露呈するとともに、それが実存するものであることを改めて痛切に感じさせる。80年代に起こった“環境正義”の提唱は20年を迎えたが、今もなお至る所で展開され、必要性を得ている。今回の研究会でも言及されたゴミ処理場、核施設などを例に挙げても、その利便の背後には必ず虐げられた弱者の存在がある。彼らの実態を浮き彫りにすることで、現実問題として“環境正義”の存在価値が明確にされるのである。

研究会は終始、和やかな雰囲気で行われた。朝から夕刻までまる一日かけて行う勉強会は、気力・体

力を必要とするが、それ以上に大きな収穫を与えてくれた。夜は広島市の中心地、紙屋町へと移動して懇親会を楽しんだ。発表を終えた後の料理は、また格別であった。

来年も研究会の開催を予定しており、現在取り扱う図書の選定が行われています。今後とも、より一層多くの方のご参加をお待ちしております。ご興味のある方は下記の事務局まで。[エコクリティシズム研究会・事務局 松山大学・伊藤詔子氏 shokoi@hiroshima-u.ac.jp] ■

[報告]

第45回日本アメリカ文学会

全国大会シンポジウム II

「アメリカの語り直し」

豊里真弓 (札幌大学)

■2006年10月14～15日に法政大学にて開催された第45回日本アメリカ文学会全国大会2日目のシンポジウムII「アメリカの語り直し—伝統の解体と流動するロジック」において、ASLE-J 会員でもある結城正美氏、辻和彦氏、中山麻衣子氏、喜納育江氏が様々な視点からアメリカの語り直しをテーマとした発表を行った。結城氏によるイントロダクションでは、「語る」ことには、過去を解体し新しいものを創る動きと古いものを再評価する動きの2種類があることが確認されたうえで、本シンポジウムが、アメリカの語り直しのプロセスに見られる緊張関係と変容を読み解く試みであることが告げられた。

辻氏の発表「破壊を創る—ハリウッド映画における語り直し」は、映像作家スピルバーグの映画 *War of the Worlds*, *Empire of the Sun*, *Catch Me If You Can*, *AI*, *Munich* 等において、特に「家族」の「破壊」がどのように描かれているかについて分析したものだ。例えば、母親との関係が永遠の憧憬でしかなく、失われれば取り戻す事のできないものとして描かれていることや、国家と家族の緊張関係が描写されていることが指摘された。ただ、個人的には、スピルバー

グの描く家族像が「アメリカ」のどのような価値観を否定あるいは強化しているのかということ、あるいは、「父」と「家族」の関係に国家がどう絡むのかという点について、もう少し踏み込んで欲しかった。

「黒人口承文学におけるヴァナキュラーなアイデンティティ表象—Gwendolyn Brooks からヒップホップまで」で中山氏は、現代の黒人たちによる主体化、つまり、主流文化に規定・客体化されたアイデンティティの語り直しについて論じた。中山氏は、黒人ヴァナキュラーのレトリックがサブカルチャーの立場から主流のレトリックを語り直す、あるいはそれに対抗する機能を有してきたと述べ、まず、主流文化内部からの語り直しの例として、ブルックスがソネット形式の詩に黒人の声を滑り込ませていることを挙げた。次に、ラップを通した一兵士の主体化の例として、イラクでの任務の合間に黒人兵士たちがラップを披露し合ったことから生まれたアルバム *Voices from the Frontline*(2006)からの一曲を紹介した。戦渦のバグダットにおいても主体化の術を持っていることに、黒人文化の底力を見る思いがした。同時に、時代や状況の制限下でどれだけ声を発することができるか、それはどのような形でなのかという問題は、何を語り直したか同様に興味深い問題なのだと認識させられた。

「国境と人種の語り直し:アメリカ南西部からの声を中心に」と題された発表で喜納氏がまず触れたのは、アメリカ社会の「褐色化」であった。喜納氏は、その「褐色化する」アメリカを考えるうえで無視できないものとしてアメリカ南西部から生まれる声に注目し、同

じ場所で多層的な物語が語られているカスティーヨ、シルコウ等の作品を取り上げた。そして、こうした書き手たちの声が「人種」「階級」「ジェンダー」等の概念では解釈しきれない境域文化を描くことでアメリカの語り直しに関与していると論じた。会場からの質問にもあったように、「歴史性ではなく場所から」及び「磁場」という表現の説明にはもう少し時間を費やしてもらいたかったものの、多文化主義文学の批評枠としての「場所」の可能性というのは、今後も様々な作品に照らして考えていきたい問題である。

結城氏は、「場所を語る/場所が語る—環境文学における語り直し」で、アメリカを「場所」として語り直すことの文化的・政治的意義について論じた。まず、山里勝己氏を引用し、「数学的、物理的な意味を有し、人間がその中で移動する枠組みを示唆する「空間」(space)と「人間の日常性を示唆する言葉」である「場所」(place)とを区別したうえで、アメリカを場所として再発見することが必要だというB.ロペスの主張等を紹介した。結城氏は、近代文化における視覚偏重を越えて場所を再発見する方法として、「聴く」「耳を傾ける」というダイアログへの志向があることを指摘した。さらに、結城氏の言う「耳の修復」のために、土地への想像力を文化に組み込むことのできる物語の力への期待があることが「場所の健康を取り戻すには物語が必要だ」(Nabhan)等の引用を通して示された。

様々な主体が多様な方法で「アメリカ」という概念と場所に働きかけていることを改めて認識させられたシンポジウムだった。■



韓国文学環境学会訪問記

高橋 勤 (九州大学)

■去る十一月四日、韓国文学・環境学会が開催され、生田代表らとともに出席した。韓国のアズリーは2000年に創設され、年二回の大会を開催するなど活発な活動を続けている。

今回の訪問のおもな目的は、来年度に金沢で予定されている日韓合同シンポジウムの打ち合わせを行なうことであった。同行したのは、結城、ブルース・アレン、小谷の面々。

またもやチョンボ

3日の夕方、韓国側のメンバーと共同シンポジウムのためのミーティングが予定されていた。その都合を知らされていなかった僕は、てっきり文学・環境学会が開催されているソウル女子大で行われるものだとばかり考えていた。ところが実際には、韓国側のメンバーからホテルに直接連絡があり、プラザホテルに6時の待ち合わせであったということ。それとも知らず、僕は4時きっかりにプラザを出発したのだった。

プラザホテルのある市庁駅からソウル女子大学へは地下鉄で1時間の道のりだった。突然ハングルだけの世界に投げ出された僕は不安だった。地下鉄の出口を出てからは、標識などない街中を、想像力と観だけを頼りにさまよい歩いた。もちろん、何人もの人に英語で話しかけ、熱心に教えはしてくれたものの、すべて韓国語である。ここだと教えられた学校は、女子大ではなく、地元の小学校だった。焦る気持ちをおさえ、それからさらに数人の人に道を訊ねてようやく女子大の校門へたどり着いた時には、もう陽はとつぷりと暮れていた。

ちょうどその頃、生田さんら他のメンバーと韓国側のメンバーはプラザで落ち合っていたことだろう。そんなこととはつゆ知らず、僕は夕闇迫るソウル女子大の構内をさまよった揚句、問いかけた女子大生に「学会は明日ですよ」と告げられたのである。

パネルでパニック

翌日、プラザホテルにソウル大学の大学院生がエスコートに来てくれた。当然地下鉄で移動するものだと考えていたら、驚いたことに、会場のソウル女子大までタクシーを用意してくれたのである。高速にのって約1時間の距離を僕はタクシーで移動したのだ。

会場に到着すると、日本語の上手な大学院生がキャンパス内を案内してくれた。美しく、設備の整ったキャンパスを見回りながら、ふと外国人教師のための一戸建てに孤立した感覚を抱いたのだった。振り返って考えると、おそらく、ソウル市内では一戸建ての住宅は許可されてはいないのだろう。ソウル市民はすべて高層アパートに住むように義務づけられており、一戸建ての住宅は外国人教師のための特別待遇であったのだ。

学会のプログラムの最後には、僕らを含めたラウンドテーブルが予定されていた。僕ら一行5名はパネルに座られ、日韓のアズリーの現状について意見交換でもするのだろう、とタカをくくっていたら、突然、韓国側のパネリストが英語のペーパーを読み始めたのである。それは、進行役のついた正式なパネルだった。隣に座っていた生田代表の手が震えたのはこの時である。

われわれが過去2度行った国際シンポジウムのことや、日本における環境意識の衰退について意見を述べ、どうにかお茶を濁したものの、「環境意識の停滞は本当に不況によるものなのか」という会場からの質問には、正直なところ虚をつかれた恰好だった。

学会の後は懇親会で楽しく和やかな時間を過ごさせてもらった。帰りもまたタクシーでホテルまで送り届けていただいたうえに、おみやげまで戴いた次第である。韓国のアズリー会員の心遣いに心から感謝したい。■

[報告]

「持続可能性と文学的想像力」

国際大会参加報告

結城正美（金沢大学）

■ 国際大会「持続可能性と文学的想像力」(Sustainability and the Literary Imagination: Transdisciplinary and Intercultural Perspectives, 11月17日～18日、国立台北科技大学、台湾)に、ASLE-Japan から森田系太郎さん(立教大学・院)と結城が参加しました。基調講演の講師は、*Ecocriticism* (Routledge, 2004)の著者 Greg Garrardさんとアメリカの代表的エコクリティックである Ursula

Heise さんという豪華な陣容。開催校の英文科の学生さん(“University of Technology”に英文科があるという事実にまず驚きます)をはじめ、英米文学研究者ら数十名が参加し、国内外から14の研究報告がありました。森田さんは“Global Warming and Gender”、結城は“Nurturing the Sense of Real Place: Poetics and Politics of Story”と題して報告をおこないました。

ところで、この国際大会をはじめ、昨今の台湾における環境文学研究には瞠目すべき勢いがあります。以前ASLE-Jニューズレターでも紹介されていましたが、淡江大学(台北)がここ数年、隔年で環境文学関連の国際学会を開催していますし、また台北にある別の大学が同様の国際大会を企画していることをつい先日ネット上で知りました。台湾にASLEが設立されるのも遠くないと伝え聞いています。

今回の国際大会は、テーマの学際性と異文化理解のスタンスに惹かれて参加したのですが、実際はさまざまな事情により、このテーマ通りの大会運営には至らなかったようです。それが非常に残念でした。しかしそれ以外の点は充実しており、とくに空港での出迎えから台北案内に至るまでお世話して下さった開催校の学部生の方々のフレンドリーで品の良いふるまいと英語力の高さはすばらしかったです。彼らが大会の雰囲気をととても気持ちのよいものにしてくれたように思います。■

ASLE-J-GRAD JOURNAL No.1

佐々木郁子 (大阪外国語大学・院)

■ここ大阪でも、秋が日に日に深まってきています。校舎の裏手に広がる箕面の山々も色鮮やかに装い始め、グラウンド沿いの檜の木々は、まだ青い実をこぼれんばかりにつけています。さて、秋を歌った詩といえば、Keatsの“To Autumn”などが挙げられますが、同じロマン派でもWordsworthだと、“Nutting”や“The Solitary Reaper”など、秋に纏わる作品はいくつかある中で、“To Autumn”のように秋そのものを題材とし

た作品はちょっと見当たりません。それでも、*The Prelude*(1805)の冒頭には、次のような秋のワンシーンが登場します。ある穏やかな昼下がり、静かな檜の木陰で大地を枕にひとり空想に耽る詩人。時折檜の実が地面に落ち、その音がにわかには彼を現実に戻します。[“Thus long I lay / Cheered by the genial pillow of the earth / Beneath my head, soothed by a sense of touch / From the warm ground, that balanced me, else lost / Entirely, seeing nought, nought hearing, save / When here and there about the grove of oaks / Where was my bed, an acorn from the trees / Fell audibly, and with a startling sound.” (1. 87-94)]瞑想へと誘う秋特有の円やかな雰囲気の中でも、現実から完全に遊離してしまうことなく、澄みきった大気、暖かな地面、木の実が落ちる音などからだ全体で感じとる。Bateが“To Autumn”に見たようなエコシステムの精緻な描写とまではいかないものの、我々に生き生きとした“a sense of being-at-home-in-the-world”をもたらす“an image of ecological wholeness”として読むことはできるかもしれません(*The Song of the Earth* 109)。

Wordsworthに想像力という内なる風を喚起した秋の風に応えつつ、私も詩的にはいきませんが、院生組織のこれまでの活動を思い出してみようと思います。私は、昨年秋にイギリス・ロマン派学会全国大会(@山形大)で、結城先生から院生組織のお話を伺ったことをきっかけに、この組織に参加しました。その後、メーリングリストで自己紹介をし、活動方針について議論を重ね、今年春より*Ecofeminist Literary Criticism*(1998)をテキストに勉強会がスタートしました。私のように大学にエコ関連の授業がない学生にとって、勉強会は大変貴重な議論の場となっています。

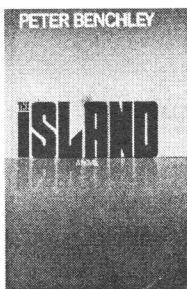
私の遅いASLE-Jデビューは、今年5月の日本英文学会(@中京大)での役員会でした。最寄りの八事駅で、生田先生、結城先生、喜納先生と偶然お会いし、緊張しつつ会場入りしたのを覚えています。巴山さんの代理で参加した私は、用意していただいた活動報告の原稿を(さも自分が書いたものであるかのように)読み上げ、先生方からたくさんのアドバイスをいただきました。小谷先生から、仙台大会のワークショップ「韓国環境文学をめぐって」のお誘いを受けたの

もこのときです。院生組織設立当初からの目標その1、「ワークショップ」は、思ったより早い段階で実現することとなりました。(ちなみに目標その2は、「翻訳」です。)

ワークショップの準備段階では、韓国に関する知識不足のため、詩人の名前の読み方や漢字表記が分からないなど、初歩的な問題で何度か躓きました。私の場合、研究室に韓国人留学生が多く、疑問点を気軽に質問できる環境にいたことは幸いでした。また、読書会という形式で韓国詩という専門外の作品を読むに当たっては、批評理論のフィルターを通して作品を分析する以前に(あるいはそれと同時に?)、感

覚を研ぎ澄まして作品を直接経験するというのを、私自身あらためて意識させられたように思います。とはいえ、最終的にはこのワークショップも、小谷先生の的確なアドバイスと、山本さん、巴山さん、森田さんの素晴らしいケーススタディのお陰で、来年夏の日韓合同シンポジウムをも視野に入れた充実した内容のものとなりました。また、お集まりいただいた方々、コメントをくださった先生方、発表の場を与えてくださった皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

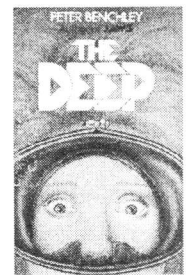
現在、勉強会の方は、テキストの第4章まで進行中です。これから新しいメンバーが増え、組織がより活性化することを心より願っています。■



現代ネイチャーライターの横顔 (6)

—ピーター・ベンチュリーについて—

琉球大学 山城 新

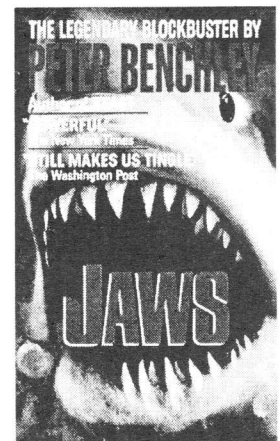


■ピーター・ベンチュリー(1940-2006)が今年亡くなったというニュースを知ったのは2月であった。病気がちだといううわさは前から聞いていて、話ができる間に彼に直接インタビューをと予定していた矢先のことだったので、非常に残念でならなかった。

「ピーター・ベンチュリー」という名前だけはおそらく人々によく覚えられていて、聞けばすぐに映画『ジョーズ』(1974年)を思い出すにちがいない。あの独特の緊迫感を伴った音楽とともに、水中で尾びれをぐいと動かし、背びれが水面をすうっと走っていく魚の目線。その目線が海水浴中の女性の周りをゆっくりと動き、至近距離になったとたんに女性の姿は忽ちに消えてしまう。鮫ハンターのクイント、魚類学者のフーバー、地元の警察官ブロディが鮫退治に乗り出す。フーバーは喰い殺され、クイントの船に鮫が襲いかかる。船を破壊した鮫にクイントはロープ付きのナイフを突き刺し、そのまま海に引きずられて姿を消す。やがてブロディー一人が生き残り、泳いで岸に戻っていく……。

エイハブ船長を想起させるクイントを始め、あまりにも *Moby-Dick* 的な結末に、アメリカ文学的相関性を見つけるのはたやすい。確かに *Moby-Dick* の背景には19世紀アメリカの漁業(特に捕鯨業)の限界が伏線としてあり、『ジョーズ』の背景としては漁業が完全に衰退し、代わりに避暑客をあてにする脆弱なツーリズム産業によって牛耳られる地元の警察当局や新聞社の無力さが作中の悲劇の元凶である。そういえばかの有名な『老人と海』でもちらりと描かれていた〈ビーチ産業の台頭〉と〈衰退していく漁業〉という構図は、『ジョーズ』の中でこのように現代版として引き継がれ、刷新されていくのである。

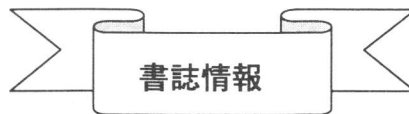
ベンチュリーの父親はナサニエル・ベンチュリーで *Off Islanders* (1961) [*The Russians Are Coming! The Russians Are Coming!* として映画化] を始めとして多くの児童小説や戦記小説やサスペンス小説を書いた小説家であった。祖父はロ



バート・ベンチュリー。フォークナーやフィッツジェラルドもゆかりのニューヨークのホテル(ジ・アルゴンキン)のラウンドテーブルのメンバーとして知られ、ヒッチコックの『海外特派員』(1940年)にも出演している。(アルゴンキンのラウンドテーブルについては映画『ミス・パーカー』を是非ご覧ください。)

このように作家の家系に生まれ、ナンタケット島やニューヨーク周辺の海辺に育った彼にとって、海を題材にした作品を書くのは必然であったにちがいない。実際にジャーナリストであった経験もあり、彼の作品はいつでも綿密なリサーチによって構想が練られている。いかに『ジョーズ』がフィクションといえども(鮫)の表象をこれほどまでに大衆化し、人々の潜在意識にリアルな影響を与えた作家も少ないのではないか。作家自身『ジョーズ』の発表後には鮫の保護活動に熱心に取り組み、最近では *Shark Trouble: True Stories and Lessons About the Sea* (2002年) を出版し、鮫の生態と保護や海での安全性について語っている。

彼の作品は『ジョーズ』の他に『ザ・ディープ』(1976年)、『アイランド』(1979年)を加えた水中冒険・海洋サスペンス三部作が知られており、他にも海を題材にした作品が多い。海についての代表的ネイチャーライターであると考えられるのである。■



今村楯夫編著『アーネスト・ヘミングウェイの文学』ミネルヴァ書房、2006年。

「まえがき」に本書の編集意図が明確に示されている。すなわち、「時代と文学を再吟味し、時代の特性と作家の関係を明らかにする上で、二〇世紀を代表するひとりの作家としてヘミングウェイをもう一度、総括的に眺めてみることは大いに意義がある。またヘミングウェイが二一世紀に読み継がれる作家として、その理由を時代背景、関連作家の中に位置づけて、作家の特徴を問い直す必要がある。」なお、本会会員である伊藤詔子氏の「ソロー、ヘミングウェイ、T・T・ウィリアムズ——ネイチャーライティングから反自然誌へ」も収録されている。小川国夫氏へのインタビュー、巻末の充実した「基本文献」と、盛りだくさんな内容である。(村上)

「越境」の方法論

- ・秋元英一、小塩和人編著『豊かさと環境』ミネルヴァ書房、2006年。
- ・山下昇、渡辺克昭編『二〇世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社、2006年。
- ・Tatsumi, Takayuki. *Full Metal Apache: Transactions between Cyberpunk Japan and Avant-Pop America*. Durham: Duke UP, 2006.

「アメリカ研究の越境」のシリーズ第3巻『豊かさと環境』は、あらゆるアメリカ研究が、すべて「環境」への深い考察となりうることを示してみせた貴重な一冊である。「豊かさの追求」を問題視する本書は、そのままアメリカなる現象の本質を問い直す。膨大なデータに基づくアメリカ研究が、逆説的ではあれど「数値化の難しい『愛』『親切』『配慮』」といったものの必要性を説くために用意されたのだとすれば、数値化され得ない学問としての文学—すなわち環境文学を研究することはますます重要となるだろう。

『二〇世紀アメリカ文学を学ぶ人たちのために』においても、環境文学の位置づけは興味深い。第3部「多様化するジャンル」に配置された伊藤詔子氏の論考は「ネイチャーライティング」を脱中心文学と位置づけ、「多様」から「越境」への橋渡しの可能性をそこに見出そうとする。

そして、「文化的政治的欧米中心主義」から「アジアの批評的主体性」の確立といった、伊藤氏がエコクリティシズムに見出した新たなアメリカ研究の道筋は、例えば巽孝之氏の新著 *Full Metal Apache* の用いる批評的方法論に通じる。日米文学の主流、亜流、変流を問わずに交錯する文化史の駆引きを、それこそアジアからの批評的主体性を前景化した巽氏の仕事は、今度は「批評の越境」の方法論を提示するものとして、これからの環境研究にも大きな示唆を与えてくれるに違いない。(波戸岡)

エペリ・ハウオファ『おしりに口づけを』村上清敏、山本卓訳、岩波書店、2006年。

「訳者あとがき」によれば、「抱腹絶倒の肛門小説」。著者のエペリ・ハウオファはトンガの南太平洋大学オセアニア・センターの長を務める文化人類学者にして作家。著者が日本の読者に向けた挨拶文には、日本人のような礼儀正しく育ちのよい国民がこんな下卑た唾いの本を読むとは信じがたいとある。テーマもさることながら、ヨーロッパ近代文学を規範とする〈小説〉概念を逸脱する、奔放で哄笑に満ちた語り、いや饒舌の世界が「下半身もやもや、みぞおちわくわく、頭くらくら」という細野晴臣の YMO コンセプトを連想させた。訳者村上氏は本学会会員。(野田)

中村邦生『風の情報—それぞれの』作品社、2006年。

「風の動きを感じたければ、舌を出してみてください」という清冽な科白で始まる「森への招待」(1995年、第114回芥川賞候補作)を巻頭に配する短編小説集。3作目「この道、通りゃんせ」は、中村氏のガイドにより行われた本学会エクスカッションをモデルとした作品。氏はまぎれもなく、卓越したアーバン・ネイチャーライティングの書き手である。あのかの、新宿駅西口から高層ビル群を抜けて東京都庁までのウォーキングをご記憶の方はぜひ。そこに出現するのは〈錯覚の風景〉。中村氏は本学会会員。(野田)

木下卓・清水明 編『ガリヴァー旅行記』ミネルヴァ書房、

「シリーズもっと知りたい名作の世界」の一環として、先の上岡克己・高橋勤 編『ウォールデン』に続いて出版された。「毒と風刺に満ちたワンダーランドへようこそ」という帯の惹句通りの、入門書としては勿体ないくらいの粒よりの論を集めた、配慮の行き届いた好企画。本学会会員である木下卓氏「見せ物の世紀」、本田蘭子氏「スウィフトの庭」の論考が収録されている。(村上)

天野哲也、増田隆一、間野勉 編著『ヒグマ学入門—自然史・文化・現代社会』、北海道大学出版会、2006年。

金沢大学の角間キャンパスには、「クマ出没注意」の立て札があちこちに見られる。だが、クマの生息地域に人が出没するにいたったというのが本当であり、クマに対して失礼である。本書『ヒグマ学入門』の帯の惹句によると、「生物としてのヒグマ・ヒグマと人との関わり・現代社会におけるヒグマを巡る諸問題を考える、分野を超えた総合的学問『ヒグマ学』初の解説書」とのこと。副題も示すとおり、ヒグマに関するすべてを網羅しようとする、野心的かつ極めて魅力的な好著である。(村上)

Philbrick, Nathaniel. *Mayflower: A Story of Courage, Community, and War*. New York: Viking, 2006.

前著 *In the Heart of the Sea* で全米図書賞を受賞したフィルブリックの最新作である。メイフラワー号でニューイングランドに到着したピューリタンたちとアメリカ先住民族の奴隷を乗せて 56 年後に当地を離れるシーフラワー号。大西洋をそれぞれ横断する両船の命運を分ける出来事がフィリッピン王戦争(1675-1676)であり、フィルブリックは当時の入植者たちと先住民との関係についてブラッドフォードとベンジャミン・チャーチという二人の人物に焦点をしばりながらアメリカ神話とも言えるピルグリムファーザーズの命運について語っている。(山城)

Brugge, Doug, Timothy Benally, and Esther Yazzie-Lewis, eds. *The Navajo People and Uranium Mining*. Albuquerque: U of New Mexico Press, 2006.

アリゾナ州からニューメキシコ州北西部とユタ州南西部にかけて広がるナヴァホ・ネイションには、かつて 1,000 以上のウラン鉱山があり、多くのナヴァホの人が働き、健康を害し、命を奪われてきた。この本は、専門家による調査と、ナヴァホのウラン鉱山労働者への聞き取り調査に基づいて書かれており、環境正義とは何かを様々な角度から問いかけている。編者の一人 Timothy Benally はかつてのウラン鉱山労働者で、この仕事を自分の使命と考え、聞き取り調査を担当してきたという。(茅野)

SCRIMSHAW: Neo-modern Literature from the Institute of American Indian Arts. Berkeley: Small Press Distribution, 2006.

ニューメキシコ大学の Joy Harjo の担当する授業で知り合った Sara Ortiz (Simon Ortiz の娘さん) が、若い世代のネイティブ・アメリカンが書いたものもぜひ読んでほしいと言って手渡してくれた本です。部族の運営する 35 の大学 (tribal colleges) のうちで唯一芸術を専門とする IAIA (Institute of American Indian Arts) に学ぶ Sara を含む 24 人の若き作家の詩や短編を収めている。歴史や伝統の重みを受け継ぎながらも、変化し続ける環境の中でさらに多様化するネイティブ・アメリカン文学のパワーが感じられる一冊。(茅野)



2007 年度 ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会について

1. 開催日時
2007 年 8 月 19 日 (日) 9 時 30 分開始 (予定)
2. プログラム
研究発表 (3 件程度)
総会
3. 研究発表募集要項
題名及び概要 (600 字) を添えて応募すること
応募先: 〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学法学部
生田省悟 宛
(e-mail: shogo@kenroku.kanazawa-u.ac.jp)
応募締め切り: 2007 年 3 月 30 日 (金) 必着
採否: 選考の上、採否については本人に連絡

